



# アメリカOT事情<その2>

## 学校システムの中で働く作業療法士

今回は学校システムの中で働く作業療法士(OT)を紹介します。アメリカでは1975年、公法94-142によって全ての障害児が可能な限り統合教育の形で、必要とされる専門的な指導を受ける事ができる権利が保証されました。これに従い、理学療法士(PT)やOTの仕事の場が医療分野のみでなく教育分野にまで広がっています。この法律は各州の州法、及び各市町村によって具体的に運用されますので実態は地域によってかなり異なるようですが、少なくとも障害児が教育現場の中で必要な訓練をその専門家によって受ける事のできるシステムが、この国ではできあがっているといつてよいでしょう。

特にOTは学習障害などの軽度な発達障害から精神発達遅滞や自閉症、脳性マヒ等の心身両面にわたる重度な障害までを仕事の領域としますので、学校現場では言語療法士(ST)とならん数多い専門職となっているようです。

ここにご紹介するDIANA WOODSさんは、この道25年のベテランOTです。彼女の勤務する学校区のあるAPACHE JUNCTIONは、ARIZONA州の首都PHOENIX市の東部に位置し4つの小学校、各々1つずつの中学校、高等学校をもつ比較的貧しい人達の多く住む小さな町です。彼女はこの学校区唯一人のOTですが、このような小さな学校区の方が教師とのコミュニケーションが取り易く仕事がしやすいと、1年前他の学校区からこちらに移ってきました。この学校区には他にOT助手1名、言語療法士(ST)4名の専門職が勤めています。現在彼女が指導を行っている子供達の年齢層は3才（小学校に発達障害児のみを対象としたプレスクールが併設されている）から18才の総勢40名ですが、これは当学校区に通う子供の数の約1%に過ぎず訓練の対象となる子供達全てをカバーできていないのが彼女の悩みの1つとなっています。子供達は原則として週2回、30~45分の訓練を受けていますので、彼女のスケジュールは昼食をとる時間もない程びっしりつまっています。

訓練の対象となっている子供達の大半は、学習障害または軽い精神発達遅滞の子供達で、他に脳性マヒの子供達が数名含まれています。この学校区は小さいため、総合教育の困難な重度障害児は他の大きい学校区にある特殊学校に送られています。彼女は毎日車に訓練用具を積んで、学区内の学校をまわり子供を訓練してまわります。中には特別な訓練室を持たない学校もあり、そのような場合体育館の舞台裏や校庭が訓練の場となります。大きい学校区では、逆に学校の中に設置されている訓練室に子供達がスクールバスで送られてくる形もあるようですが、彼女は子供に移動時間を費やさせるよりは療法士が動いた方がいいとの意見を持っています。彼女の悩みの2つ目はこのような子供達に欠かせない感覚統合訓練のためのゆづり遊具の設置場所に困る事です。同じような

長崎大学医療技術短期大学部 土田 玲子



●写真1：プレスクールの集団指導

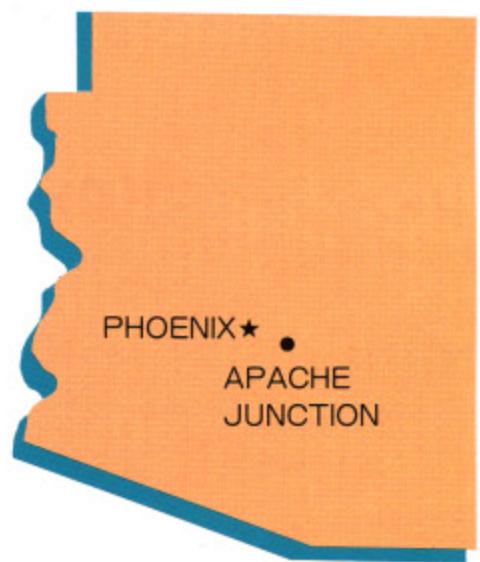
悩みを持つ療法士のために携帯用のハンガーが販売されていますが、(写真1)これにも動きや重量の限界があり充分とはいえないません。

学校システムの中での仕事の難しさはこのような人的、物理的環境の問題だけには限らないようです。医療分野での仕事の発想で育てられたOTにとって教育分野の発想の中で治療目的の設定や、その治療手段の説明を充分他の学校関係者に理解してもらう事なども意外に難しい問題となっているようです。特に財政上の問題も絡んで、学業上での問題が明確になりにくい高機能の学習障害児などはたとえOTの適応があっても対象からはずされてしまうこともままあるようです。

彼女のこれから仕事に対する希望は、もっと教室の中に入る事で教師や子供達により密着した仕事をしたい事、及び子供が各学校に散らばっているためにまとまりにくい親の会を組織して、親同士の支え合いや啓蒙活動を活発にしたい事だそうです。



●写真2：プレスクールの集団指導



●写真3：プレスクールの集団指導



●写真4：体育館の舞台裏で